

令和七年一月度
御報恩御講

しじょうきんご どのご へんじ
『四条金吾殿御返事』

文永九年五月二日 五十一歳

き へんまた ほけきょう ぎょうじゃ しよにん
貴辺又日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人に
たま これあにる つう ほけきょう しんじん
かたり給ふ。是豈流通にあらずや。法華經の信心をとを
たま ひ 休 ひ ごうじょう
し給へ。火をきるにやすみぬれば火をえず。強盛の
だいしんりき ほっけしゅう しじょうきんご しじょうきんご かまくら
大信力をいだして法華宗の四条金吾・四条金吾と鎌倉
じゅう じょうげばんにん ないし に ほんごく いっさいしゅじょう くち
中 の上下万人、乃至日本国は一切衆生の口にうたはれ
たま
給へ。

(御書五九九〇二行目～四行目)

◎強調・確認◎

令和の「四条金吾となれ」・不惜身命の信心が大切と心得よう。

本年は「活動充実の年」と方針が打ち出された。充実した信行を確立していくには、一人ひとりの法華講員としての自覚が大事である。

まず、御法主上人の御指南をどのように拝しているのか。御意を拝し、身をもって唱題行に励んでいるのか。

次に、不惜身命の決意を心がけているか。一人が一人の折伏を決意しているか。三に、「一人立つ信行」を決心して、

住職の指導を受けきって、異
体同心の団結を目指そうと情
熱を持って行動しているか。

理屈や言葉だけ、他人事の
ように無自覚な人、困難を恐
れて意気地の無い人と言われ
ない様にしていくことが肝要
である。

今年の方針の意義を深く考え、他人から言われて動くのではなく、自ら熱意を持って使命を感じ、自分に出来ることを精一杯工夫していくことである。

金吾殿は、大聖人様が竜口の刑場において、首切られんとしたとき、

自らもお供をして殉難しようとした人物である。今の我々にも、金吾殿の「不惜身命の信心」が必要であると勉強した。

富士の清流を御護りできるのは、我々法華講員のみである。総本山を御護りし菩提寺を発展させていくためにも、

正法興隆・寺檀和合を祈り、
身命を惜しむことなく「止暇
断眠の信行」を実践していく
決意と覚悟を固め、実践ある
のみと発心していこう。

発心していくことで、各家
庭の一家和楽が確立し、一人
ひとりの境涯の向上が実証さ
れ、

社会に貢献でき一天広布に繋がっていくのである。

「自分がするのだ」という決意。更には「一人が一人の折伏と育成」に前進していくことが必要である。

お互い悔いが残らない年となるように「常に御本尊様から護られ、大聖人様から激励を戴いている」と拝し、不退転の信心を進めていこう。